Yamakaido

ISSN 0917-8821

「やまかいどう」は埋蔵文化財センター建設時に発掘調査を行った敷地内の「山海道遺跡」にちなんで命名された情報誌です。

栃木県埋蔵文化財センターだより

やまかいどう

No. 27
2001.3

特集 平成12年度栃木県発掘速報

下野国分寺金堂基壇北西部確認状況

―― 千年の時を越えて ――

ずっとずっと数えきれないくらい長い間、立たされています。一人で立っているのは寂しいので、仲間たちと肩を寄せ合って立っていました。私たち凝灰岩は、石切場で切り出され大勢の人の手によってここまで大切に運ばれました。国分寺に到着すると「石所」で作業する人たちによって礎石や階段の石、地覆石、羽目石、葛石に加工されました。私たち羽目石は、その時からずっと立っています。

長くこの場所に立っているので、これまでにいろんな人たちを見てきました。それは、国分寺を作るために都から派遣されてきた技術者や、造営のために下野国内から集められた人々、三毳山麓の窯や宇都宮の窯から瓦を背負ってきた人たちなどです。

また、落慶法要に参列した下野国司や各地の郡司のほか、一生懸命国の安泰を願って、お経を読んだり写経したり勉強したお坊さんたちもたくさん見てきました。この間に私たちの立っている金堂も何度か改修工事がされ、壊れた仲間たちは違う場所に去ってゆきました。途中からは仲間の石が足りなくなったため、階段に使われていた石材が転用されて羽目石に使用されています。西暦940年には、平将門が下野国府を攻めており、地元の伝説ではこの時将門は国分寺に火を放ったと言われていますが、私たち羽目石が焼け焦げていないことからも金堂は焼けていないことがわかります。将門はそれほど悪い人ではなかったようで、千年かかって誤解が解けたようです。金堂は地震か台風のような自然災害により最後は倒壊したと考えられます。

（国分寺町教育委員会　山口 耕

もくじ

◎特集　平成12年度　栃木県発掘速報
　◯県内発掘調査の動向 ……1
　◯栃木県内発掘調査一覧 ……2
　◯埋蔵文化財センターの発掘調査から ……4
　◯発掘調査現地説明会資料
　　西刑部西原遺跡Ⅲ区・杉村遺跡Ⅻ区 ……13
　◯市町村の発掘調査から ……17
◎博物館・資料館ニュース ……20
◎発掘調査報告会 ……21
　◯「平成13年度特別展・テーマ展　栃木の遺跡」……22

マークは平成13年度特別展・テーマ展「栃木の遺跡―最近の発掘調査の成果から」関連の項目です。

マークは平成12年度「栃木県発掘調査報告会」関連の項目です。

――平成12年度県内発掘調査の動向――

前年度と比較すると県・市町村ともに調査件数は減少しており、それはそのまま県土の開発が縮小していることの具現のような気がする。別表に示したが市町村で28件、県（埋文センター）での調査は16件であった。

1月には足利市が実施していた樺崎寺跡が国の指定史跡になった。長期間継続して調査してきた中世の足利氏縁の遺跡で先年には浄土式庭園が確認されるなど市教委の地道な努力と計画的な進行の結果である。今後は史跡地内の公有化や史跡整備など本格的な保存や活用などの施策に進む。

保存を目標に確認調査が実施されている遺跡としては上三川町と宇都宮市による上神主・茂原遺跡の調査があるが、ここで今年度は特に大きな成果がみられた。上三川町地域では東西・南北方向にＬ字形に配される3間×3間の掘立柱建物群が、宇都宮市地域からも4間×3間の大型建物などが確認され、規則的に配される様や柱掘り方の規模などから古代の公的権力を背景とする施設と位置づけることが確実な状況となってきた。調査は来年度に継続されるが当初の計画に沿う成果が見えてきた。今後の調査に期待したい。

指定史跡の活用という目的で整備が進む史跡に南河内町の下野薬師寺跡と宇都宮市の飛山城跡、小山市の寺野東遺跡、国分寺町の下野国分寺跡などがある。

いずれも地元の市町が国庫補助を受けて進める事業であるが、下野薬師寺跡はすでに回廊建物の北西偶角の復元も完了している。ガイダンス施設の展示工事も進行中で13年度早々には開館の予定と聞いている。

本県ではこうした「遺跡の広場」の事業が導入され、史跡整備が終了した史跡は宇都宮市の根古屋台遺跡、栃木市の下野国庁跡、小山市の乙女不動原瓦窯跡などがあり、積極的な活用が図られている。こうした保存が図られる遺跡が増えることが望まれる。

調査件数の減少が見られるものの宇都宮市、足利市などでは多い。縄文時代では藤岡町の城山遺跡、高根沢町の大野遺跡での成果が注目される。後者の調査については本号の特集に記述されている。

古墳時代では足利市の藤本観音山古墳が積極的な保存活用を図る目的で調査が継続されている。藤本観音山古墳は墳丘長116.5mに及ぶ県内最大の前方後方墳で市の指定史跡になっている。今年はくびれ部のラインが確認され、周溝から有段口縁の壺形土器が出土している。周溝の西から北西部にかけてのところが不整形となることなども古式な特徴を示している。同市の神畑遺跡では縄文時代の遺構などと共に平安時代の水田跡が見つかっている。

下野国分寺の金堂跡（国分寺町提供）

奈良時代では郡衙正倉と推定される上神主・茂原遺跡の調査が注目されるが本紙の特集に記述してある。

遺物として注目したいのは鹿沼市に所在する竜地遺跡である。調査面積は少ないが住居址から畿内系の暗文土器が複数個体出土している。また、宇都宮市の西下谷田遺跡の遺物整理では新羅系の土器が数点出土していることが分かった。

史跡整備を目指す下野国分寺跡の調査は、金堂を中心に進められた。昨年、南階段の遺存が良好だったので他の部分の確認にも期待されたが基壇上の磚敷きが良存していた割には礎石の痕跡があまり明瞭とはならなかったのには疑問が残る。西面から北面にかけての羽目石は良く残っていた。

中世期の調査が足利市の岩井山城跡・樺崎寺跡、小山市で祇園城跡、氏家町の旧西導寺遺跡などで行われている。

県内各地で遺跡の指定保存、さらにその活用の動きが活発に進行していることは結構なことである。

（調査部長　大金　宣亮）

現地説明会資料

発掘調査の途中や終了時には現地で説明会を行うことがあります。調査担当者が直接案内するほか、資料の配付や出土品の展示も行います。13ページから16ページは、平成12年度に遺跡で開催した際の「現地説明会資料」です。

平成12年度 栃木県内発掘調査一覧

市町村教育委員会等が行った発掘調査

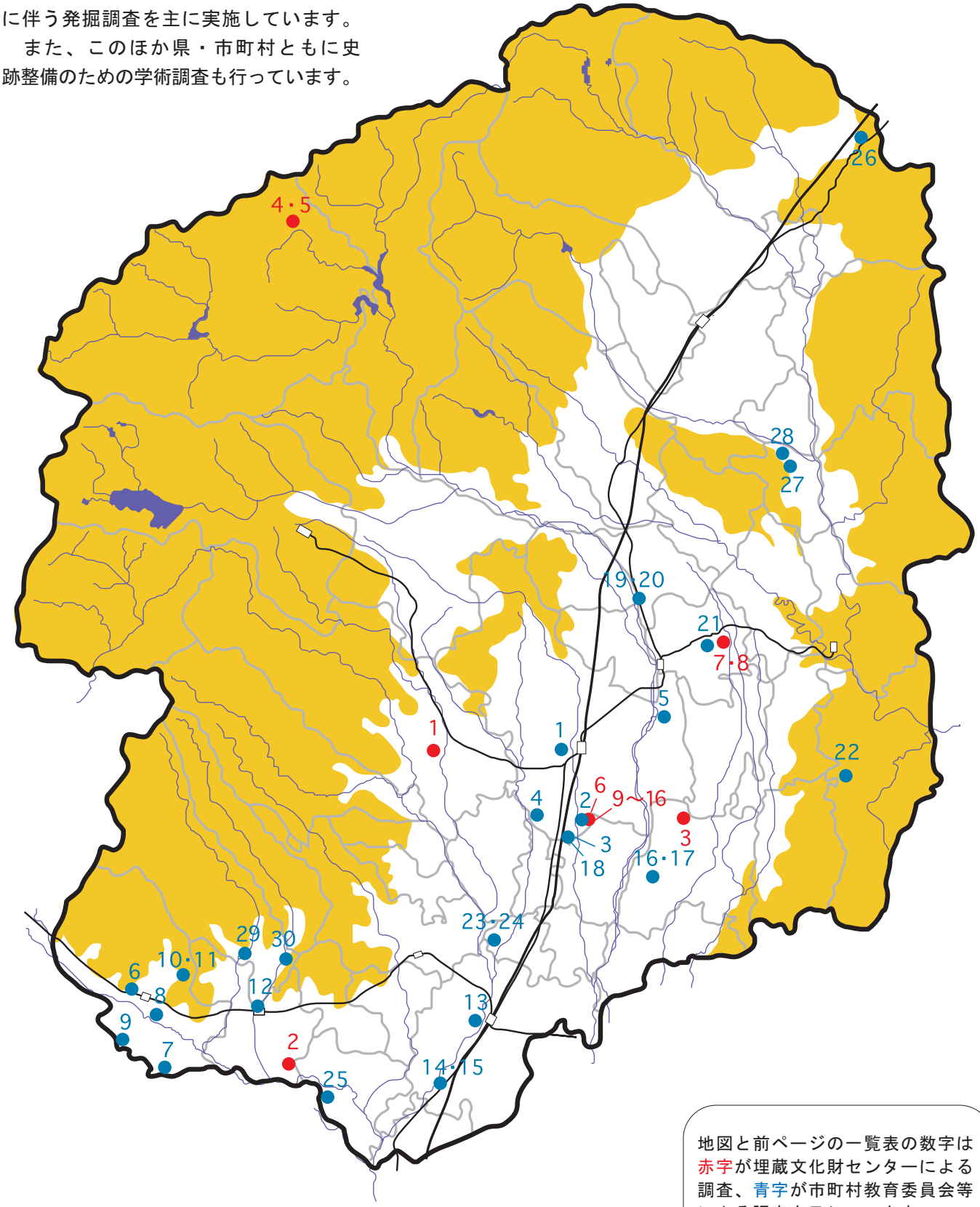
No.	遺跡名	市町村名	主な時代
1	宇都宮城跡	宇都宮市	中世／近世
2	東谷遺跡群	〃	古墳時代
3	上神主・茂原遺跡	〃	奈良時代
4	岡田山遺跡	〃	縄文時代～中世
5	刈沼遺跡	〃	縄文時代／古墳時代
6	鑁阿寺十二坊跡	足利市	中世／近世
7	永宝寺古墳	〃	古墳時代
8	岩井山城跡	〃	中世
9	藤本観音山古墳	〃	古墳時代
10	神畑遺跡	〃	縄文時代
11	樺崎寺跡	〃	中世／近世
12	佐野城跡（春日岡城）	佐野市	江戸時代
13	祇園城跡	小山市	中世
14	亀田遺跡	〃	縄文～平安
15	乙女北浦遺跡	〃	縄文～近世
16	亀山II遺跡	真岡市	
17	和田I遺跡	〃	
18	上神主・茂原遺跡	上三川町	奈良時代
19	旧西導寺遺跡	氏家町	中世
20	勝山城跡	〃	縄文時代／中世
21	西続橋遺跡	高根沢町	古墳時代
22	天矢場遺跡	茂木町	縄文時代
23	下野国分寺跡	国分寺町	奈良・平安時代
24	東薬師堂7号遺跡	〃	奈良・平安時代
25	城山遺跡	藤岡町	縄文時代／近世
26	七曲遺跡	那須町	旧石器時代
27	吉田新宿古墳群	小川町	縄文・古代
28	上宿遺跡（第２次）	〃	古墳～平安
29	傾城塚遺跡	田沼町	縄文～平安時代／古墳時代
30	唐沢山城関連家中・隼人屋敷	〃	中世～戦国期

埋蔵文化財センターが行った発掘調査

No.	遺跡名	市町村名	主な時代
1	竜地遺跡	鹿沼市	古墳・古代
2	馬門南遺跡	佐野市	古墳・古代
3	井頭遺跡	真岡市	古墳時代
4	川戸釜八幡遺跡	栗山村	縄文・古代・中世
5	仲内遺跡	〃	縄文・古代・中世以降
6	杉村遺跡	宇都宮市	古墳
7	大野遺跡	高根沢町	縄文時代
8	大用地遺跡	〃	中世
9	西刑部西原遺跡III区	宇都宮市	古墳～平安
10	中島笹塚遺跡　I区	〃	古墳・奈良
11	〃　II区	〃	縄文・古墳
12	〃　III区	〃	古墳
13	杉村遺跡XII区	上三川町	古墳
14	〃　XIV区	〃	奈良・平安
15	立野遺跡VI区	〃	古墳
16	磯岡遺跡VI区	〃	古墳～平安

埋蔵文化財センターでは、国や県による道路建設、工業団地造成などの公共工事に伴う事前の発掘調査を行っており、一方、市町村教育委員会では市町村が行う公共事業や民間による開発に伴う発掘調査を主に実施しています。

また、このほか県・市町村ともに史跡整備のための学術調査も行っています。



地図と前ページの一覧表の数字は赤字が埋蔵文化財センターによる調査、青字が市町村教育委員会等による調査を示しています。

掲載遺跡は平成13年2月28日までに埋蔵文化財センターに情報提供されたものです。

埋蔵文化財センターが行った発掘調査から

大野遺跡（南那須町）

・所 在 地　那須郡南那須町鴻野山地内

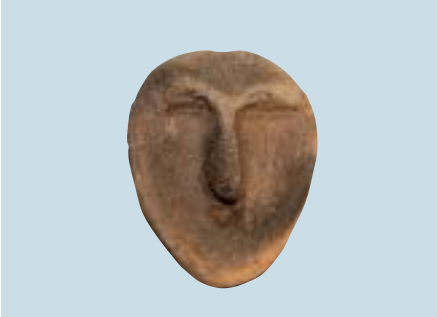
・調査原因　主要地方道宇都宮市―烏山線改良工事に伴う事前調査

大野遺跡の発掘調査は、平成11年度から始まり、本年度は継続して行いました。遺跡は、高根沢町飯室から、町境をはさんで南那須町鴻野山に広がり、県内屈指の縄文時代の遺跡として有名です。今年度調査を行ったところは、下の写真のように台地から谷に向かう斜面にあたり、集落や墓地、斜面に溜まった厚い土の中からパンケース程の大きさの整理箱で400箱以上の縄文土器や石器が出土しました。

ムラ（集落）としての景観は、多くの竪穴住居とともに穴を掘って柱を建てる掘立柱建物が点在していたようで、周囲にはドングリなどの堅果類を食料として貯えた穴があったと考えられます。斜面下は谷で、ここを水場として利用していたと思われます。

竪穴住居は、直径4～5m程の大きさで、中央に石を組んだ炉があります。ここには、石皿（現在の摺鉢と似た機能をもつ）の破片をリサイクルしたものもありました。また、下の写真の家には炉の脇の床に穴を掘り縄文土器が埋めてありました。壁際には、柱を立てるために掘った柱穴が確認され、細かく調べますと柱と屋根だけ建て替えていたことがわかりました。

全体写真をみますと、大きな円が竪穴住居で、小さな円は食料貯蔵用の穴か墓穴と考えられます。台地の南側斜面には集落として生活の場に使われたり、死者を葬る墓地として使われていたようです。集落と墓地は時期的に一部重なっているようですが、全般には集落から墓地に土地利用が変化したと考えられます。



墓穴とともに、埋葬施設とみられる埋甕が発見されました。埋甕は穴を掘ってここに土器を立てたり、伏せたり、横にして埋めたもので、死産児などの甕棺か出産の時の胎盤を収納し、新生児の成長発達を祈った施設という説もあります。

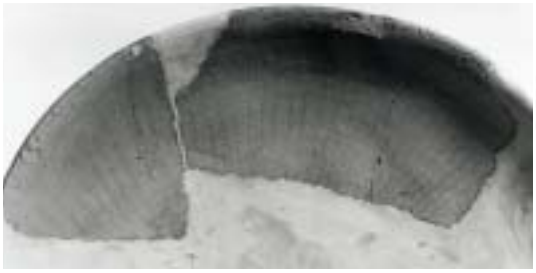
出土品では、石斧や石鏃などの生活道具とともに、土偶などの信仰・祭祀具・腕輪などの装身具が出土しました。土偶は、一般に女性を表現した人物像であり、生殖・繁栄にかかわる母性の再生観念を表すともいわれます。土偶は表現によってハート形土偶と山形土偶と呼ばれるものが出ました。ハート形土偶は北関東から南東北にかけて分布し、ハート形の顔で、顎(あご)が前に突き出た表現をしています。山形土偶は頭がほぼ三角形の山形をしていて、関東地方に広く分布しています。顔は、粘土を貼って眉と鼻を連続してＴ字状にし、目や口も粘土を貼って、棒などで中心に窪みを作り表現しています。また、妊娠中の腹を表現した土偶は、腹がピラミッドのように尖り、腹の下に突起のある土偶は、出産の様子を表しているようです。また、男性性器を表現し、男性の生業活動などに関する祭祀具という石棒も出ました。

装身具では、北陸で産出するヒスイで作った大珠が特筆されます。穴があいていて、紐で首にさげていたようで、地域の中心となるムラで出るといわれます。耳飾は、土偶の耳にも表現され、耳たぶに穴をあけて装着していたようです。そのほか、平行する溝を表現した腕輪や石製のペンダントなども出土しました。

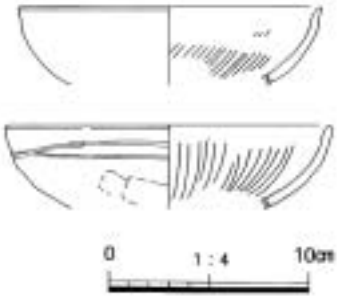
竜地遺跡（鹿沼市）

竜地遺跡は、鹿沼市のほぼ中央部を南流する黒川右岸の水田地帯にあります。この地に鹿沼警察署の移転が計画されたことを受け、今年度は、前半に発掘調査を実施、後半は整理・報告書作成作業を行っています。これまで、このような河川の氾濫原と思われる低地に、遺跡は存在しないと考えられていましたが、今回の調査で、古墳時代後期から奈良・平安時代（6世紀前半から10世紀前半頃）にかけての集落跡が発見されたことは大きな成果でした。調査面積は約2,000㎡ですが、発見された遺構は、竪穴住居跡29軒、掘立柱建物跡1棟、掘立柱塀跡2条、溝跡2条、土坑10基などでした。↙

竜地遺跡北区全景（南から）



施された暗文



畿内産土器実測図

このうち特に注目されるのは、7世紀中頃の竪穴住居跡（SI-19）から発見された土器です。この土器は、内面に施された「暗文（あんもん）」から畿内産の土師器坏形土器と判明しました。暗文とは、土器の形を整えてからその内面にヘラ状工具を使って放射状やラセン状に文様構図を描いたもので、ミガキの光沢の違いによって淡い装飾効果を表現しているものです。発見された土器は型式的には「飛鳥Ⅲ」と言われているもので、7世紀第３四半期頃（651年～675年頃）に奈良県飛鳥地方で使われていたことが分かっています。↗

これまでに栃木県内の遺跡でこのような畿内産の土器が発見された例は非常に少なく、日本三戒壇の一つで、国指定史跡下野薬師寺や人名瓦が数多く出土し、大規模な倉庫群が発見されたことで、郡衙の正倉（米倉）の可能性が高いとして話題になっている上神主・茂原遺跡等で僅かに発見されているだけです。

今回の調査では、この竪穴住居跡（SI-19）から3点、また東側に隣接する竪穴住居跡（SI-17）から2点、合わせて5点の畿内産の土師器が発見されています。なお、それぞれの住居跡から出土した土器（写真）が互いに接合したことから、この2軒はほぼ同時期に廃絶されたことが推測されます。

しかし、これらの土器が、なぜ竜地遺跡にもたらされたのか、という謎が残ります。畿内から誰かが持って来たものなのか、竜地遺跡の人が畿内から持ち帰ってきたものなのか、そして、最大の謎は、下野薬師寺や上神主・茂原遺跡のような地方支配の拠点として中央と直結していた寺院や官衙から出土するような畿内産の土器が、中央との直接的な結びつきは薄いと思われる川沿いの低地に作られた一集落から出土しているのかということです。竜地遺跡で発見されたこの畿内産の土器は、一体私たちに、何を伝えようとしているのでしょう。その具体的な内容については、現時点では不明ですが、こうした問題を明らかにすることが今後の課題と言えます。

SI-17 作業風景

杉村遺跡（宇都宮市）

杉村遺跡は、JR宇都宮線雀宮駅から東へ約2km、宇都宮市東谷町にあります。この東谷町周辺は遺跡が密集する地区です。宇都宮南高校の南側には2基の前方後円墳（双子塚古墳、笹塚古墳）があります。また北関東自動車道の建設に先だって発掘調査が行われ、古墳時代中期～後期のムラの跡や古墳群が見つかっています。

今回調査は、県道雀宮・真岡線の道路拡幅工事に先だっての発掘調査で、東谷町交差点（宇都宮南高校付近）から北関東自動車道の東側までの間に東西に細長い発掘調査区（幅4m前後、長さは10～30m程）を11箇所、設けることになりました。①は東谷町交差点の東側約240mの調査地点（6区-3）の発掘調査風景です。県道脇の拡幅部分に発掘調査区があるのがよく分かる写真です。②はこの地区で見つかった溝跡の写真です。溝は幅約1mある大きなもので、南北方向に伸びています。東谷町交差点の東側約170mの地点（8区東側調査区）でも同じ規模の溝跡が発見されています(写真③)。これらは古墳時代中期のムラを区画する溝跡と考えられます。なお、溝跡からは土師器と炭になった木材片が出土しています(写真④・⑤)。区画溝が使われなくなった時点で、当時の人々が煮炊きやお膳に盛る器として使っていた土師器を、ゴミとして棄てたのかもしれません。

①

②

③

次に、この2つの溝の間（約70m）で見つかった竪穴住居跡の様子をみてみましょう。第7調査区は、幅4m、長さ約30mの狭い範囲で合計6軒の古墳時代中期の住居跡が見つかっています。遺構の密度が高いことからムラ跡が付近に広がる可能性が多くなります。（写真⑥・⑦）

このムラの南側（約250m）には笹塚古墳があります（写真⑧）。古墳時代は、生きている人が住んでいるムラと、死者が眠る古墳群とは、明確に地域分けされています。ですから、笹塚古墳にほど近い今回調査区でムラの跡が見つかった意義は、当時のムラ社会のあり方、空間をとらえる意識、地域開発のようすなどを考えていくうえで大きな意味を持つと思われます。

⑥

⑦

④

⑤

⑧

仲内遺跡（栗山村）

仲内遺跡は、鬼怒川支流湯西川の源流域に位置する河岸段丘上（標高約700m）の遺跡です。湯西川ダム建設に先立って、平成10年度から発掘調査を行っており、縄文時代から近世にかけての遺構や遺物が見つかっています。

今年の調査を振り返ってみましょう。6月には、地元の小・中学生が発掘体験学習に来ました。子供たちは、本物の遺物を間近で見たり、触ったりしながら熱心に話を聞いていました。また、話に聞いた縄文土器などの遺物が出てくるかもしれないと、移植ゴテにも力が入り、子供たちは夢中になって土を掘っていました。土の中から何か出てくるたびに「これは何かな」などと私たちに次々に質問が飛んできました。まさにドキドキ？の発掘体験でした。

発掘体験学習

発掘体験で掘った土の下からは、縄文時代の竪穴住居がいくつも発見されました。住居跡は、馬蹄形をした土器を埋め、石で囲んだ複式炉と呼ばれる炉をもつものが多く、土器や石器なども見つかっています。複式炉や土器の文様からは、湯西川が東北地方と何らかの交流を持っていたことが分かりました。

ある住居跡からは、おもしろい形の石皿が見つかりました。この石皿の底の部分には、3本の脚がついています。4本脚の石皿が見つかることはありますが、3本脚のものは珍しいものです。

縄文時代の竪穴住居跡

縄文時代の複式炉

調査区の東側には、南壁にカマドをもつ平安時代の住居跡も見つかりました。

石皿の出土状態

12月になると、冬の訪れが早い栗山村では、雪の降る日が何日かありました。雪の降った翌日は、雪かきをしてシートをはずすことから作業が始まります。当時の人たちは、雪深いこの地方でどのような生活を営んでいたのでしょうか。この季節は、遺跡も雪の下に埋もれ、静かに春の訪れを待っています。

平安時代の竪穴住居跡

雪の中の作業風景

東谷中島地区遺跡群

東谷中島地区遺跡群は都市基盤整備公団が開発する東谷中島地区の土地区画整理事業地内にある遺跡群です。平成6年度から発掘調査を実施しており、旧石器時代から近世に至る様々な遺構・遺物が発見されています。ここでは平成12年度に発掘調査を実施した遺跡のうち、中島笹塚遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区、立野遺跡Ⅵ区、磯岡遺跡Ⅵ区、杉村遺跡XIV区を紹介いたします。

中島笹塚遺跡Ⅰ区

中島笹塚遺跡は、宇都宮市の南端、砂田町字笹塚地内にあります。平成12年度は中島笹塚遺跡Ⅰ～Ⅴ区までの5カ所で発掘調査を行いました。このうちⅠ区は、南北方向の道路予定地1,800m²を調査しました。

古墳時代後期の竪穴住居跡(SI-1)

調査の結果、古墳時代の竪穴住居跡が8軒、奈良時代の竪穴住居跡が2軒、確認されました。これらの竪穴住居は、いずれも一辺が4～5mの方形で、大半の住居が北壁にカマドを持っていました。

写真の竪穴住居跡（SI-1）も、このうちの一つで調査区の北東の隅にありました。この住居のカマドには、当時の人が使っていたと思われる多くの遺物が残されていました。御覧のとおり、きれいに形をとどめたままの土器が多く出土しました。これらは、古墳時代後期、今からおよそ1400年前のものです。

カマドから出土した遺物

中島笹塚遺跡Ⅱ区

Ⅱ区は、中島笹塚遺跡Ⅰ区の西、約160mのところにあります。台地西端から低地にあたる地区のため、夏季には水没していました。今回、南北方向に道路予定地900m²を発掘調査しました。

古墳時代の溝(SD-201)

Ⅱ区は、中島笹塚遺跡Ⅰ区やⅢ区に比べ調査面積が狭く、低地で水の影響を受けたためか、調査区内には小さな石や砂がたくさん認められました。遺構は、あまり見つかりませんでしたが、調査によって確認されたのは、調査区の北部にある土坑が1基と縄文時代の土器が集中して見つかった場所、それに南部にあった古墳時代の溝などが確認されました。この溝（SD-201）からは古墳時代中期、今からおよそ1600年前の土師器片

古墳時代の溝から出土した木片

と厚さ3～4mmの棒状の木片が見つかりました。写真にも、木片が確認できると思います。また、北部で土器が集中していた場所からは、縄文時代前期の土器片が見つかりました。

中島笹塚遺跡Ⅲ区

中島笹塚遺跡Ⅰ区とⅡ区の南部、標高約85mの台地上にあるのがⅢ区です。Ⅲ区は、東西方向の道路予定地1700㎡を発掘調査しました。

調査によって、古墳が3基（古墳時代中期が1基、

古墳時代中期の方墳(奥)と墓穴(手前)

後期が1基、時期不明が1基）、土坑墓（墓穴）が1基確認されました。3基の古墳のうち、2基は四角い方墳でした。残りの1基は、古墳の端がわずかに調査区の北西にはいっていただけなので、方墳かどうかは分かっていません。また、土器もわずかしか出なかったため時期もよく分かりませんでした。

写真の奥に見えるのが、3基の古墳のうちの1基です。調査区の東端にあった方墳（SZ-303）です。長さは約8mで、古墳時代中頃のものです。残念ながら、埋葬部分は残されていませんでした。

この古墳の西側8mのところには、細長い楕円形をした長さ3m弱の穴（SZ-373）がありました。写真手前にあるのが、この穴です。ここも誰かのお墓だったらしく、鉄の剣が出土しました。どんな人がここに眠っていたのでしょうか。

墓穴から出土した鉄の剣

立野遺跡Ⅵ区

立野遺跡は宇都宮市の南東部の中島町字小路谷田にあります。遺跡の西方約1.5kmに田川、東方約6kmには鬼怒川が南流しています。これらの河川に因って形成された段丘上を南流する武名瀬川をはじめとして、小さな谷地が南北方向に形成されています。「西谷田」と呼ばれる狭い谷の西側が当遺跡です。平成10年度に調査された立野遺跡Ⅴ区は東西方向に流れる現在の水路を挟んで南北の関係にあり、当遺跡は北側に位置します。周辺には東谷遺跡群や杉村遺跡等のムラがあり、また、笹塚

竪穴住居跡より出土した土師器(南より)

古墳や琴平塚古墳群などの大古墳があります。

今回の調査で古墳時代中期から後期の竪穴住居跡8軒と土坑1基が確認されました。また、時期不明の溝が2本見つかっています。竪穴住居跡8軒の内6軒はカマドがなく、2軒が北にカマドを持って

東側にある溝石鏃等が出土している

います。土師器（坏、椀など）や須恵器が出土しています。

本調査区の北側に隣接して試掘が行われました。この試掘地域には一辺15m程の住居跡をはじめ住居跡が多数確認されております。住居跡の多くは東にカマドを持ったものが多いようです。また、住居跡を埋めた土からは、6世紀の初め頃噴火した群馬県にある榛名山の火山灰が発見されました。

磯岡遺跡VI区

磯岡遺跡は東谷・中島地区遺跡群の南東端部に位置する遺跡で、今回は6回目の調査になります。調査の結果、古墳時代から平安時代までの集落が確認されました。これまでに調査が終了している磯岡遺跡の遺構群と同じ時期のものです。竪穴住居跡20軒、掘立柱建物跡5棟、溝17条、土坑38基を調査しました。竪穴住居跡は古墳時代のものは平面正方形で1辺6mを越えるやや規模が大きいものも見られるのに対し、平安時代になると平面長方形で1辺2m前後とかなり小型のものへと変わってきます。住居跡は全て微高地上に作られており、低地には全く見られませんでした。

SI-18は古墳時代後期の竪穴住居跡です。残りがあまり良くなく、残念なことに住居の北西隅を溝に壊されています。柱穴は4本で、北壁にはカマド

SI-18遺物出土状態（南から）

が設けられていました。カマドは土師器の甕と粘土を組み合わせて作っています。住居の北東隅には貯蔵穴が掘られています。貯蔵穴の中からは10点ほどの土師器の坏や甕が重なって出土しました。食事が終わった後、食器をきれいに片づけたのでしょうか。

杉村遺跡XIV区

杉村遺跡XIV区は北関東横断自動車道路宇都宮・上三川インターの北方約200mの新4号国道沿いにあった住宅地と平地林の部分約1,500㎡を調査したものです。本遺跡からは、奈良・平安時代の推定東山道跡の側溝とされる溝5条と中世の井戸跡2基が発見されました。

推定東山道跡の側溝は住宅地の工事や平地林の抜根などによって壊されていましたが、残っている側溝の跡を調査してみると、出てきた土器の破片などから、8世紀前半、8世紀後半、9世紀代の3

推定東山道跡（南西上空から）

時期の側溝があったことが確認されました。現代の道と同様に、道の両側に側溝が作られており、側溝間の幅は最大で12mもあるため、古代にも広い道があったことが分かりました。この側溝は、道路部分と周りの土地とを区画したり、道の排水などのために作られたものと思われます。ところによっては、古代の人が掘った工具の痕跡なども発見されました。

推定東山道跡（南から）

現場フラッシュ

大野遺跡

敷石住居跡（縄文時代後期初頭）

（財）とちぎ生涯学習文化財団協賛　埋蔵文化財センター10周年記念

第２回　全国 国分寺サミット

国分寺の瓦を愉しむ　―住田コレクションの世界―

国分僧寺と国分尼寺

天平年中になると疫病（天然痘）や飢餓が多く、さらには朝鮮半島「新羅国」との国交関係の悪化などによって社会的不安が広がりました。

そこで、天平13年（741）、聖武天皇と光明皇后は「国分寺建立の詔」を発して、全国60余国に国分僧寺と国分尼寺を建立させました。一般にはこの2つの寺を国分寺と呼んでいます。そして、各国々の国分寺で国家鎮護（疫病、災害、外的の除去と五穀豊穣）を祈らせることで、世の中の不安をしずめようと考えました。

僧寺には僧20名、尼寺には尼10名を所属させました。国分二寺は僧寺の方が一般に伽藍の規模が大きかったようです。これらの国分二寺の建立にはそれぞれの国の経済力によって建築に優劣があり、完成への時間に遅速のあったことは当然のことでありますが、屋根を葺く瓦の、ことに軒先の部分の瓦にはいろいろな文様をみることができます。それらをひとつひとつ見てゆくと、その寺の歴史を知るひとつの手懸かりにもなります。

住田コレクション

今回展示した瓦類は、故住田正一博士が明治45年頃から20有余年にわたり、暇をみつけては全国各地の国分寺跡を訪れて採集されたもので、その蒐集は北は陸奥国分寺から、南は大隅国分寺まで60カ所以上に及びます。

これらの一部は、昭和9年に『國分寺古瓦拓本集』として刊行されていますが、その後の蒐集品を加えた資料も含めて改めて学術資料集を刊行する計画がもち上がり、財団法人「交通研究協会」（理事長住田正二氏〈ＪＲ東日本相談役〉）の御協力を得て現在整理を進めております。この住田コレクションの全貌を実見した方は、故平塚運一画伯だけでございますので、学術資料集刊行に向けての資料整理の途上でありますが、この資料を是非とも多くの方々に公開して頂ければと住田正二博士にお願い致しましたところ、ご快諾をいただきました。

（日本窯業史研究所「かわらの美」特別展より抜粋）

平成１３年１月２８日　現地説明会資料

西刑部西原遺跡Ⅲ区・杉村遺跡Ⅻ区

―都市基盤整備公団による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査―
栃木県宇都宮市平塚町・砂田町

（財）とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
栃木県下都賀郡国分寺町字国分乙４７４
ＴＥＬ　０２８５（４４）８４４１

はじめに

東谷・中島地域は古墳時代の中ごろ（今からおよそ１，５００年～１，６００年前）に、当時「下毛野」と呼ばれた栃木県地域でももっとも大きな古墳やムラが作られたところです。奈良時代には下野国河内郡に属し、周辺には上神主・茂原遺跡なども存在する、古代史の上で重要な地域です。

西刑部西原遺跡では、本年度は古墳時代や奈良・平安時代のムラを発掘しています。注目されるのは昨年度まで調査していた、奈良・平安時代（今から１，３００～１，１００年前）の「東山道」と推定される道路跡の近くから大きな掘立柱建物跡が発見されたことです。東谷・中島地区では初めてのことです。

また、杉村遺跡では、本年度は古墳群（有力者のお墓である「古墳」が集まっているところ）を調査しています。

西刑部西原遺跡Ⅲ区

旧石器時代の遺物集中地区３、古墳・奈良・平安時代の竪穴住居跡６９、掘立柱建物跡７、井戸、円形有段遺構１、土坑１１、土器集中地区１、時期不明の土坑６、溝１を発見しました。

西刑部西原遺跡（上空から）

遺跡の南側には琴平塚古墳を中心とした、１４の古墳が発見されており、群れを成すように存在していました。それに対し、今回の調査地区ではたくさんの住居や建物の痕跡が発見され、ムラがあったことが分かりました。年代的に南側の古墳群と重なる時期の住居もあり、墓と住宅地がはっきりと区別されていたことが分かります。また、奈良・平安時代の道路跡に近接して、大きな建物跡が発見されており、両者の関連性が注目されるところです。

旧石器時代の遺物は、今から１５，０００～１４，０００年前の尖頭器（槍の先）、削器（ものを削る石器）等が出土しました。しかし大半を占めるのは、石器を作る際に出た石くずで、それらが飛び散ったような状態でした。このことから、昔のひとびとがこの場所で石器を製作したことが分かります。興味深いのは、使われた石材が黒耀石と呼ばれる天然のガラスで、この付近ではとれないものであることです。直接取りにいったか交易によって手にいれたかは分かりませんが、信州から運ばれたものと考えられます。

古墳時代の竪穴住居跡からは「引手」（ひって）と呼ばれる鉄製の轡の部分と、刀のさやを腰にさげるための銀製の部分が出土しています。どちら普通の農民がめったに持たないものです。近くに豪族の住まいがあってそこで使っていたものが捨てられたとか、修理するために一時的にそこに置かれていたとか、いろいろ考えられます。また、何をかたどったのかはっきりしませんが、明らかにへらで絵が描いてある土器の破片が出土しています。

旧石器時代の石器が出土した状況

白く点のように見えるところは石器のかけらが出土した地点です。石器を製作したときに石くずが飛び散った様子が再現できます。

竪穴住居跡の中の施設

住居の床面をきれいにしたところです。写真上方にカマドと石器が見えます。黄色い床面に黒く浮き出して見えるところがありますが、大きい方が貯蔵穴、小さい二つは柱穴が埋まった痕跡です。

絵が描かれた土器

須恵器の表面に土器を焼く前にヘラのようなもので線が描かれています。三本の指のようなものがあって足のようにみえるので、鳥を描いたものとも考えられます。

紡錘車

素焼きの土製円盤の中心に鉄の軸棒を差し込んだ状態で出土しました。このような組み合わせは珍しいものです。

奈良・平安時代の遺構はいろいろな種類のものが発見されました。道路跡に面する地点では、長方形の竪穴建物跡、堀立柱建物跡、井戸がそれぞれ二つずつ発見されました。その中で竪穴建物跡は、平面形が異様に細長く、柱穴が無く、床の踏み固めが弱く、遺物もあまり出土していません。このような特徴からは生活のにおいが感じられず、住居と考えるより、何かの作業を行うための「工房」と考えた方がよいようです。これらはその位置から判断すると、それぞれがばらばらに存在したのではなく、関連し合ってそれぞれの役割を果たしながら存在していたと考えられます。昨年までの調査では道路跡の側では同時代の遺構が少なく、当時の山林を道路だけが通過しているような印象がありましたが、今回、はじめてまとまった建物群がみつかったことは当時のムラと道路を考える上で大きな手がかりになると言えます。

杉村遺跡Ⅻ区

杉村遺跡の今年度の調査はⅫ区からⅩⅥ区までの５箇所で行っています。今回見学していただくⅫ区では、古墳時代の中頃（約１，５５０年前）の有力者のお墓（古墳）を５箇所調査しています。どの古墳でも、その周りに掘られている堀の中ほどに、およそ１，５００年前に群馬県の榛名山（二ツ岳）が噴火した時の火山灰の層が見られました。

磯岡北３号墳　今回調査した中では最も大きい古墳で、円墳（円い形の古墳）です。周りに掘りをめぐらし、いちばん深い南側部分では１．４m下まで掘ってあります。墳丘（丘のように高くした部分）は、直径２１m・堀の底からの高さ２．７mで、２段に造られています。埴輪は使われていませんでした。古墳の南西側と南東側の途中の段には土師器の甕や坏や須恵器の大甕が壊れたものが並んで残されていました。堀の中からもたくさんの破片が出土しています。葬式に参列した人たちの会食か、または死者に食物を捧げる儀式に使った食物や飲物の器と考えられます。

古墳の頂上からは、長さ２．６m以上で幅約０．８mの木棺（棺桶）の痕が見つかりました。後の時代に掘り返されてかなり壊されていますが、死者が身につけた飾りのガラス小玉（ビーズ玉）が数十個、鉄の刀が２本、鉄の鏃が１８本残されていました。また、掘り返された時に周囲に捨てられた土の中にも、鏡が１枚と鉄の刀が１本ありました。鏡は直径７．５cmの小さなもので「珠文鏡」という種類です。このように、死んだ人に副えて入れた品物を「副葬品」と言います。

その他の古墳　２号墳（径約１３m・高さ０．９m）は今回は調査していません。１号墳（推定径約１１m）・４号墳（推定径約９m）・５号墳（径８．６m）・６号墳（径５．８m）の３箇所を調査しました。どの古墳も調査した範囲からは埋葬施設（死者を葬った部分）は見つかりませんでした。１号墳の埋葬施設は、まだ調査していない南側部分に隠れているかもしれません。

３号墳の南西部から出土した土器

３号墳の段に残された土師器と須恵器

３号墳から出土した鏡（珠文鏡）

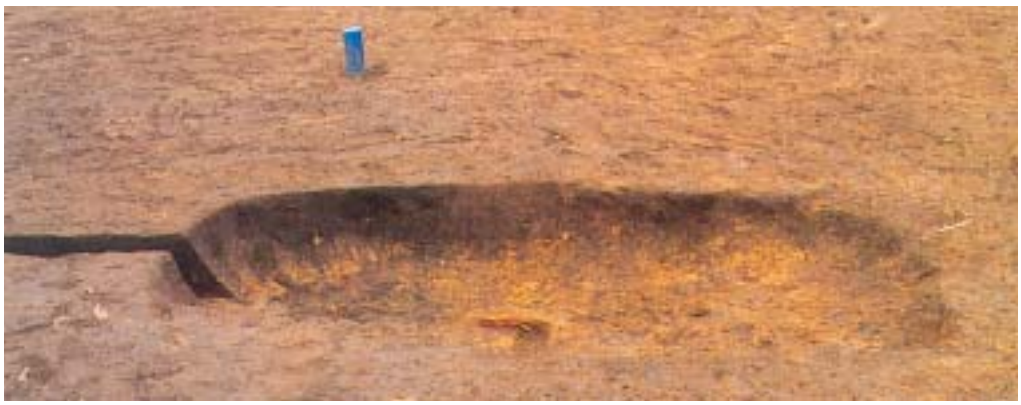
中央のつまみに紐を通す穴があり、文様のある面の反対側が鏡になっています。縁の部分は少し壊れています。

３号墳の木棺の痕跡

写真手前の部分は壊されています。向かって左側に刀を２本重ねて置き、その左側には鉄の鏃の束があります。

土壙墓（どこうぼ）　死んだ人を穴の中に葬るだけのお墓が、３号墳の北側で３箇所見つかりました。木棺（棺桶）は使っていなかったようです。穴の中の死体も消えて土にかえってしまっています。古墳に葬られた人と関係がある、それよりも少し身分が低い人たちの墓と思われます。

３箇所のうちのひとつ（SZ−２２）　では、写真に示したような副葬品が置かれていました。あとの２箇所（SZ−２３とSZ−３６）では、副葬品は何も出土していません。穴を埋めている土の一番上の層の中に、SZ−２３では小さな丸石がたくさん、SZ−３６では古墳時代と思われる火山灰の粒が、それぞれ入っていました。



土壙墓（SZ-２２）

SZ−２２では、中央部におよそ８本ほどの鉄の鏃が束になってあり、その北側（写真では右側）には鉄でできた鐸（音の鳴るベル）が３個重なって置かれていました。

おわりに

今回、この地区で初めての本格的な旧石器時代の集落を明らかにできました。古墳群は、近くの東谷古墳群を築いた支配者たちにしたがって立野遺跡や杉村遺跡に住んだ人たちと係わると推定され、東谷中島地区内では最も古い古墳群です。古墳時代の馬具や刀の金具は他の地域から持ち込まれた可能性が高いものです。奈良〜平安時代には大規模な道路が作られることから類推すると、古墳時代も交通の要衝であった可能性があります。奈良〜平安時代の大形の建物跡は、当時の道路から数十メートルの位置にあり、何か関係があったと思われます。

遺跡は単独で存在するものではありません。今年度の調査は、墓に対する集落、道路に対する建物といった関係を考えるのに重要な発見だったと言えます。

市町村教育委員会等が行った発掘調査から

上神主・茂原遺跡（宇都宮市）

上神主・茂原遺跡は、宇都宮市茂原町と上三川町上神主地内にまたがる奈良時代を中心とした遺跡です。人名を記した瓦が多く出土することから、明治時代のころより注目された遺跡で、「上神主廃寺」あるいは「茂原廃寺」と呼ばれ、長い間寺院跡と考えられてきました。市と町では、この実態を解明するために平成9年度から合同調査を進めておりますが、今年度は遺跡の性格付けについて大きな進展が見られました。

まず、上三川地区において東西に4棟・南北に5棟の整然と並ぶ掘立柱建物跡が確認されました。また、宇都宮地区では、非常に大型の掘立柱建物跡1棟が確認されました。これらは、いずれも総柱式の掘立柱建物跡で、建築学的には高床式の倉庫に復元できるものです。

また、本遺跡の中心建物である瓦葺建物跡は、昨年までの調査で周囲に溝の巡ることが推定されていましたが、今年度その南西コーナー一部を確認したことにより、四方が溝で整然と囲まれていたことが明らかになりました。一つの建物が溝で囲まれることは大変まれなことで、この瓦葺建物跡が特別重要に扱かわれていたことが推測されます。

さらに今回、建物跡の重なりや建て替えが確認されたことにより、瓦葺建物跡の前と後の時期にも建物群が存在していたことが明らかになりました。これまで本遺跡は、8世紀中頃の創建である瓦葺建物を中心とした比較的短命な施設と考えられていましたが、今回建物跡の変遷が確認されたことにより、ほぼ奈良時代全般を通して存続した施設であることが判明しました。

以上のように今回、整然と並ぶ大規模な倉庫群が確認されたことにより、これまでの寺院説はほぼ否定され、当時の行政施設である「郡衙正倉」と言われるものである可能性が高くなりました。郡衙は国府とともに、古代における地方行政支配の拠点施設であり、特にその正倉は、租税として徴収された米（稲か籾）を収納する重要施設とされています。

なお、本遺跡を最も特徴付ける人名文字瓦は、これまでの寺院説では寄進瓦のようなものとして考えられてきました。ところが行政施設となると、全国的にみてもこのように人名文字瓦が多く出土する遺跡はないと言われています。人名文字瓦についてはさらに謎が深まったとも言えます。

（宇都宮市教育委員会　梁木 誠）

東西・南北に整然と並ぶ倉庫跡群

ほぼ同規模・同形態で一直線に並ぶ倉庫跡群

大型倉庫跡（大きな柱穴がきちんと並んでいます）

倉庫跡の柱穴（かなり太い柱の痕跡がみられます）

姿川第一小南遺跡（宇都宮市）

宇都宮市の南西部、姿川の左岸にある姿川第一小南遺跡は今回でIII次調査となります。

縄文時代から中・近世にわたる集落跡で、これまで200軒近い住居跡と40棟程の掘立柱建物跡を調査しました。本格的に集落が営まれたのは古墳時代前期からで、この時期の住居跡は約40軒確認し、多数の土器の他に勾玉、管玉、砥石、鉄鏃などが出土しました。住居跡は、床面積が約８m^2（4.8畳）から約70m^2（42.4畳）とさまざまです。すべての住居が同時に建っていたわけではありませんが、未調査部分を含めるとこの倍以上の軒数になると推定され、この時期の集落跡としては市内でも有数の規模と言えます。

古墳時代後期の住居跡は80軒程調査しましたが、この中に、一辺8m（約64m^2＝38.7畳）の方形で北壁にカマドを2カ所作り、10本の柱が整然と配置された住居跡（167号）がありました。四隅の4本が屋根を支える柱で、他は間仕切りや補助的なものと考えられます。

奈良・平安時代の住居跡は約70軒調査しましたが、この中には墨書の記された土器が10点近く出土した177号住や鍬先、斧、刀子などの鉄製品が10点程まとまって出土した193号住など、興味深い資料が得られました。

（日本窯業史研究所　新井　潔）

古墳時代前期の住居跡（176号）

古墳時代後期の住居跡（167号）

吉田新宿古墳群遺跡（小川町）

今回の調査地点は古墳時代前期の群集墳である吉田新宿古墳群の南部にあたる県指定史跡那須八幡塚古墳、吉田富士山古墳のほぼ中間に位置しています。調査は工事の倉庫増築に伴うもので発見された遺構は、縄文時代前期（6000年前頃）の竪穴住居跡や墓坑、古代以降（1600年前以降）の溝2条があります。竪穴住居跡は長辺7m、短辺4mの平面が隅丸長方形をしたもので、炉は中央南寄りの入り口近くに焼成面があり、炉を囲う石2個が認められました。主柱穴は6本のほか壁柱穴が見られ、主柱穴に対応する6本が堀方の深いものでした。出土遺物としては礫器、チャート製の石鏃、擦石、土器があります。土器の特徴から縄文時代前期の黒浜式と考えられました。墓坑は2基確認され、平面形は円形で直径1mから1.4m、深さは80cmありました。出土遺物は少なく土器のほか墓標とも考えられる川原石が認められました。溝は2条確認され道路状遺構の側溝である可能性があります。断面観察から数回の掘り返しが確認されています。溝の方向は北に位置する那須八幡塚と南に位置する吉田富士山古墳を避けて設置されているようです。出土遺物としては土師器が発見されていますが時期については不明です。

（小川町教育委員会　真保 昌弘）

縄文時代前期の住居

平行に走る2条の溝

旧西導寺遺跡（氏家町）

瓦囲い火葬墓の発掘

平成12年12月、氏家町は工場跡地の整地に伴い旧西導寺遺跡を発掘調査しました。この遺跡は氏家駅前にある中世寺院跡で、鎌倉～戦国時代に活動した氏家氏の菩提寺・西導寺があった場所（江戸時代に町内の現在地に移転）です。鬼怒川の氾濫原なのでローム層はなく、砂質土が主体の1m以上の堆積層がみられますが、その上部の灰褐色砂質土層がカワラケや内耳土器などが出土する中近世の文化層です。調査区の一角からは廃棄した瓦を投げこんだ瓦溜めや、いくつかの柱穴も発見されましたが寺院の建物跡と特定するには至りませんでした。遺跡の範囲が更に東側、南側に及んでいることも予想されます。

ところで、この場所には石像の蔦地蔵（つたじぞう）が祀（まつ）られており、その前面に東西に向い合って江戸期の石仏が配列し、各列の南端には中世（鎌倉期相当）の五輪塔が2基向き合って立っていました。これらは、昭和31年に現在の西導寺境内に遷座（せんざ）されましたが、その折に蔦地蔵周辺から唐草文、巴文などの中世瓦が採集され、西導寺に保管されています。

今回の発掘調査では、この蔦地蔵の跡地確認にも重点があったのですが遺存が悪くつかめませんでした。しかし、その近辺と見られる地点で火葬墓が発見され、前述の中世五輪塔と関連する可能性もありそうです。

火葬墓は、直径約44×35cm、深さ約30cmの円筒形の穴に、壁に4枚の平瓦を立て並べたもので、穴の上半位置に縁を打ち欠いた平瓦が水平な状態で出土し、蓋のように用いたようです。穴の内部には土が充満し、焼けた骨の細片や粒が多量に混っていました。骨には原形が分かるものはなく、砕けた状態に近い感じです。中に容器にあたるものはなく、木質片などもありません。これらの様子から、この墓壙（ぼこう）は、瓦で囲った円筒状の穴に火葬骨細片を直に埋納したものと思われます。

火葬墓に転用されていた軒平瓦

墓壙を囲った平瓦は破損品の転用で、蓋様の瓦には釘穴がみられます。その中で、壙体の上部に用いた一枚は瓦当（がとう）文様が鮮明に分かる軒平瓦でした。文様は、中心に菱形文様をおき左右対称の唐草文を配する「菱形唐草文」で、瓦当の表面調整の仕方や離れ砂などの技法と合わせて14世紀後半の製作と見られます。この火葬墓の上限年代を示すものです。

この火葬墓は、高僧や上級武士など貴人の墓とみられ、中世を通じて機能した西導寺の在り方を裏づけるものと言えましょう。瓦囲いの蔵骨施設は、本県では初出で北関東でもほとんど発見例がなく、畿内で13～14世紀に五輪塔などに伴う数例が報告されています。この墓制を、氏家氏の地に及んでいた“都風”とする見方もあります。ともあれ、今後の研究に役立つ成果となれば幸いです。

（海老原　郁雄）

瓦囲い火葬墓。円筒形に破損した平瓦を立て廻らす。内部に骨片と土が埋積している。

博物館　資料館　NEWS

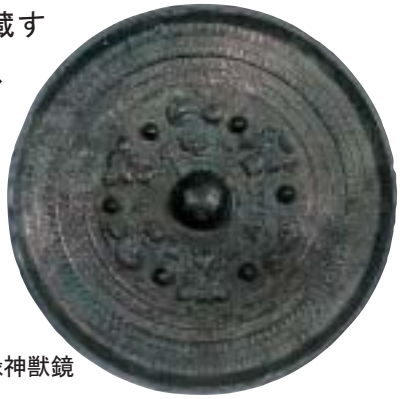
なす風土記の丘資料館

第10回特別展「烏山町内の遺跡」
4月25日(水)～5月20日(日)
会場：湯津上館（Tel 0287-98-3322）
　発掘調査を実施した滝田本郷遺跡、中山窯跡などの遺物を展示し、さらに、烏山町教育委員会、及び各個人所蔵の町内出土遺物なども加えています。
　旧石器から近世まで、資料や写真を紹介し、地域の歴史を考えてみます。

第10回特別展記念講演会「烏山町内の遺跡」
5月13日（日）13：30～15：30
会場　小川館（Tel 0287-96-3366）
講師　栗田浩史氏
　　（烏山町教育委員会生涯学習課主事）

栃木県立博物館（Tel 028-634-1311）

市町村連携事業　地域移動博物館
・市貝町立歴史民俗資料館
　企画展「埴輪と鏡」
　会期:平成13年７月21日(土)～9月9日(日)
・石橋町テーマ館
　企画展「埴輪と鏡」
　会期:平成14年2月13日(水)～3月24日(日)
　県立博物館が所蔵する埴輪や鏡とともに、開催町の古墳時代資料も加えて展示を構成し、各地域の古墳文化を探ります。


三角縁神獣鏡

小山市立博物館

　今回の企画展は、栃木県には弥生時代の遺跡の発見が少ないながらも、近年の大塚古墳群内遺跡（栃木市内）の発掘調査により弥生時代の人面付土器が発見され話題を呼び、さらには清六III遺跡（野木町）の発掘調査により、再葬墓群が調査されたりと、県内の弥生時代も徐々にではありますが分かってきたところです。
　そこで、かつて昭和40年に小山市内の西浦（田間）遺跡で発見された小銅鐸にかんがみ、関東地方を中心に弥生時代から古墳時代始まり頃に見られる、祭祀と信仰に関する展示を企画し、周辺地域における近年の発掘調査の成果をふまえながら、青銅の鋳造技術の素晴らしさと、併せて祭祀や信仰に関係する遺物から弥生時代から古墳時代へ移り変わる時期について考えていただければ

主な展示資料
　西浦遺跡出土小銅鐸、大塚古墳群内遺跡出土人面付壺形土器、朝日観音遺跡出土鉄剣、内沢遺跡出土小銅鐸、文脇遺跡出土小銅鐸及び銅釧・玉類（県指定）、根田遺跡出土銅釧、登呂遺跡出土鳥形木製品、梶栗浜遺跡出土多鈕細文鏡など186点。
休 館 日：毎月曜日（祝日は除く）
　　祝日の翌日（その日が日曜日、土曜日又は休日に当たる場合は除く）
　　館内整理日（毎月第4金曜日）
　　年末年始（12月28日～1月4日）
　　特別整理期間（年1回、10日以内）
　　（4月23・27、5月7・14・21・25・28、6月4日）
関連事業：記念講演会『弥生時代の祭祀』
　　5月5日（土）14時から　視聴覚室
　　講師　明治大学教授　石川　日出志氏
　　定員60名　申し込み　4月24日から

栃木県埋蔵文化財センター
栃木県立博物館
共催
とちぎ生涯学習文化財団
埋蔵文化財センター
設立10周年記念

平成12年度 発掘調査 報告会

当埋蔵文化財センターでは調査した中からいくつかの遺跡について、年度ごとに報告会を行っています。平成12年度は、センター設立10周年の節目を迎え、10年間の成果報告を行うほか、下記の6遺跡について報告を行います。調査担当者による一般向けの解説です。スライド等を使い、なるべく分かりやすく報告したいと思います。

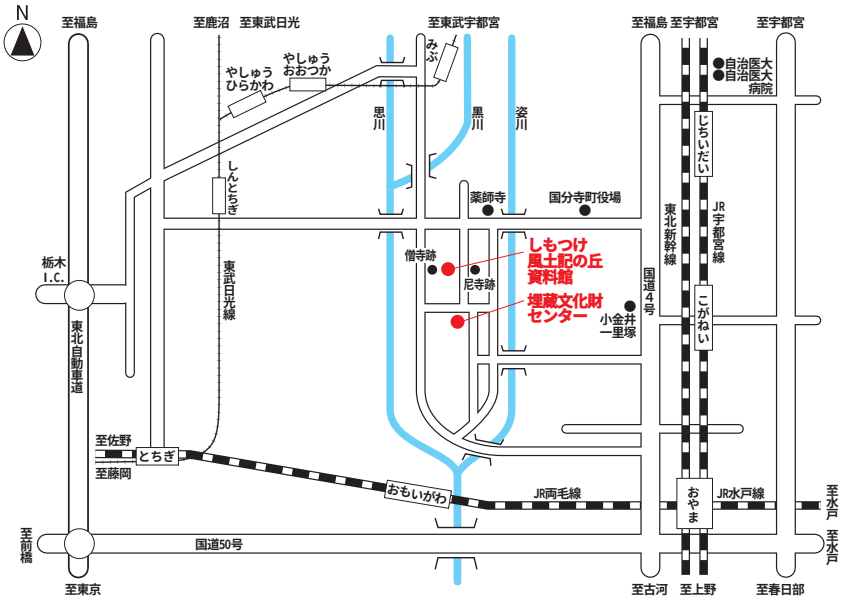
日時：平成13年6月17日（日）
　　午前10時～午後3時
場所：栃木県立博物館　講堂
定員：200名
入場：無料
申込：県立博物館普及資料課（Tel 028-634-1312）まで
　　電話にてご連絡ください。
発表遺跡：1. 大野遺跡（高根沢町）
　　2. 竜地遺跡（鹿沼市）
　　3. 杉村遺跡（宇都宮市）
　　4. 仲内遺跡（栗山村）
　　5. 西刑部・西原遺跡III区（宇都宮市）
　　6. 杉村遺跡XII区（宇都宮市）

編集後記

平成12年度栃木県発掘速報特集号も皆様の御協力のもと無事発行の運びとなりました。今年度より紙面を一新いたしましたが如何でしたでしょうか？今後とも更により良く、読みやすい『やまかいどう』を目指していきたいと思います。皆様のご意見、ご感想をお待ちしています。もうすぐ桜が咲き始めます。月日の移ろいの早さを感じる今日この頃、新しい年に向けて脱皮しようと思います。

《埋蔵文化財センターへのご案内》

- JR小金井駅から約4km、車で約10分
- 東武壬生駅から約6km、車で約15分
- 東武栃木駅から約9km、車で約20分



編集　（財）とちぎ生涯学習文化財団
　　埋蔵文化財センター
発行　栃木県埋蔵文化財センター
　　〒329-0416
　　栃木県下都賀郡国分寺町大字国分乙474
　　TEL 0285-44-8441（代）FAX 0285-44-8445
　　E-mail　webmaster@maibun.or.jp
　　URL　http://www.maibun.or.jp/
印刷　ヤマゼン コミュニケイションズ（株）

しもつけ風土記の丘資料館　特別展・
栃木県立博物館　テーマ展

平成13年度　栃木の遺跡

—最近の発掘調査の成果から—

栃木県では、毎年多くの遺跡で発掘調査が実施されています。それらの成果を、早い時期に、より多くの方に理解していただくため、平成11・12年度を中心とした調査によって得られたさまざまな資料を、県南・県央の2館でご覧いただくことになりました。埋蔵文化財センターや各市町村教育委員会が調査整理し保管している、県内のおもな出土品等を展示します。ぜひお誘い合わせの上ご来場いただき、文化財を身近に感じ、祖先の暮らしに思いを馳せてみて下さい。

☆主な展示予定資料

展示室のスペースや遺物の整理日程の都合により、各館の展示資料が変更になることがあります。（◎は２館共通展示）

旧石器時代（紀元前8000）

◎上神主・茂原遺跡（上三川町・宇都宮市）石器
・城山遺跡（藤岡町）貝
・羽場遺跡（烏山町）縄文土器・石器

縄文時代（紀元前400）

◎大野遺跡（高根沢町・南那須町）
縄文土器・石器・土偶・腕輪
◎御霊前遺跡（益子町）土器・土偶

弥生時代（紀元後250）

◎伊勢崎Ⅱ遺跡（真岡市）土器

古墳時代

◎上神主・茂原遺跡（上三川町・宇都宮市）鏡
◎松山遺跡（佐野市）土師器
・上宿遺跡（小川町）土師器
・姿川第一小南遺跡（宇都宮市）土師器
◎磯岡北3号墳（宇都宮市）鏡
・田間車道北遺跡（小山市）石製模造品
・塚山南古墳（宇都宮市）須恵器
◎段ノ浦3号墳（鹿沼市）鉄製品・耳環

（飛鳥）（710）

◎竜地遺跡（鹿沼市）畿内産土師器
◎西下谷田遺跡（宇都宮市・石橋町）
新羅系土器

奈良・平安時代（1192）

◎上神主・茂原遺跡（上三川町・宇都宮市）
軒先瓦・文字瓦
◎下野国分寺跡（国分寺町）軒先瓦・かわらけ
◎鶴田Ａ遺跡（真岡市）墨書土器
◎溜ノ台遺跡（小山市）墨書土器・鉄製品
◎北原東遺跡（上三川町）銅鏡

鎌倉・室町時代

◎西刑部西原遺跡（宇都宮市）銅鏡
◎旧西導寺遺跡（氏家町）瓦（火葬墓）

江戸時代

◎登谷遺跡（茂木町）陶磁器・煙管（墓）

4月14日（土）～5月20日（日）

しもつけ風土記の丘資料館

下都賀郡国分寺町国分993（Tel 0285-44-5049）

7月15日（日）～8月31日（金）

栃木県立博物館

宇都宮市睦町2-2（Tel 028-634-1311（代））

●関連講座『栃木の遺跡』（展示解説等）
7月29日（日）13:30～15:30
●連続講座『考古学入門講座』
第1回　8月18日（土）13:30～15:30
第2回　8月19日（日）13:30～15:30
講師：栃木県立博物館職員
申込：栃木県立博物館普及資料課（Tel 028-634-1312）

2館共通　利用の案内

開館時間：9:30～17:00
（入館は16:30まで）
休 館 日：月曜日（祝日・休日を除く）
祝日・振替休日の翌日
博物館のみ途中定期消毒休館有
観 覧 料：博物館　一般250（200）円
大学・高校生120（100）円
中学・小学生60（50）円
資料館　一般100（80）円
小中高大生50（40）円
※（　）内は20名以上の団体料金